上越教育大学附属小学校

（様式４－２：2019 年度　モビリティ・マネジメント教育（交通環境学習）にかかわる学校支援制度
実施結果報告書）

実施結果報告書

１．学習名称：
「えきまち上越」（総合的な教育活動）

２．テーマ：
駅を起点にまちとかかわることを通して、まちを生きる人の営みを捉えたり、まちにおいて駅がもつ役割を考えたりしながら、人と人とが互いにつながり合うまちのとらえをつくる

３．実施教科：
創造活動（総合的な教育活動）

４．関連単元：
（社会科）身近な地域や自分たちの市の様子を大まかに理解すること
（社会科）市の交通の広がり，市役所など主な公共施設の場所と働きなどに着目して、身近な地域や市の様子を捉えること
（道徳科）「感謝」「よりよい学校生活、集団生活の充実」「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」

５．実施単元数：
6

６．学年	３	７．クラス数	１	８．生徒数	３３

９．実施内容

Ⅰ　大型スーパーの閉店とショッピングセンターの継続と「まち」
（平成３１年４月９日、４月１７日、４月２６日、令和元年５月２８日、７月１７日、１０月２５日　上越市直江津）

Ⅱ　朝市と「まち」の人の営み　＊旅費交通費支出
（平成３１年４月１７日、令和元年５月２３日、６月１９日、７月１０日、９月１１日、１０月３日　上越市高田、上越市直江津、上越市柿崎、妙高市新井）

Ⅲ　鉄道会社の人の営み　＊図書資料費支出
○　えちごトキめき鉄道株式会社　直江津運転センター　見学
（令和元年６月４日　上越市直江津）
○　えちごトキめき鉄道　代表取締役社長　鳥塚 亮　様　特別講演
「たのしいトキめき鉄道」
（令和２年２月１４日　上越教育大学附属小学校３年１組教室）

Ⅳ　上越市・妙高市の駅を中核としたまちづくり政策
○　妙高市企画政策課　係長　長谷川　賢治　様　講話
「駅を中核としたまちづくり」
（令和元年１０月９日　妙高市役所　コラボホール）

○　上越市企画政策部交通政策課　主事　北島 太朗　様　講話
「えちごトキめき鉄道の利用促進政策について」
上越市企画政策部交通政策課　主事　西山　瑶　様　講話
「高田地区及び直江津地区のこれまでのまちづくりについて、これからのまちづくりの政策について」
上越市産業観光交流部産業政策課　主事　畑山　充　様　講話
「上越妙高駅周辺の開発について（開業から現在まで）」
（令和元年１１月１８日　上越市役所　木田庁舎　会議室）

Ⅴ　鉄道乗車体験及び「まち」のとらえのひろがり

○　北陸新幹線　Ｅ７系「はくたか」乗車体験活動及び糸魚川の「まち」を見つめる　＊旅費交通費支出
（令和元年１１月８日　上越妙高駅－糸魚川駅）

○　ＪＲ東日本信越本線・えちごトキめき妙高はねうまライン　特急「しらゆき」乗車体験活動及び長岡の「まち」を見つめる　＊旅費交通費支出
（令和２年１月３１日　長岡駅－高田駅）

Ⅵ　教室は「えきまち」

○　教室に「えきまち」をつくる　＊消耗品費支出
（平成３１年４月～令和２年２月　上越教育大学附属小学校３年１組教室）

○　「えきまち上越フェア」　＊消耗品費支出
（令和元年１０月２０日　上越教育大学附属小学校３年１組教室）

１０．学習のながれ：

Ⅰ　大型スーパーの閉店とショッピングセンターの継続と「まち」

４月、活動をスタートするにあたり、鉄道を利用して移動する目的とまちを見つめる視点を設定することを考え、上越市直江津で５月１２日の閉店が決まっていたイトーヨーカドー直江津店を見つめることを柱とした。直江津駅周辺に立地するイトーヨーカドー直江津店は開店から３２年で閉店となった。児童は後に知ることとなるが、上越市も人口減少と自家用車の普及に伴って商業地の郊外化が進んでいた。イトーヨーカドー直江津店の店舗には、地元の商店がテナント出店するエルマールショッピングセンターがあり、直江津の商業の中心であった。

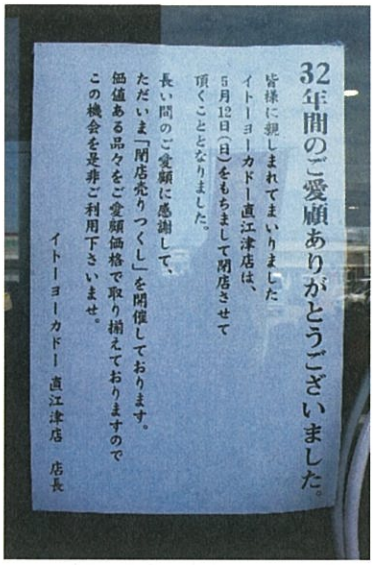
本校のある上越市高田からは、高田駅で乗車し、春日山駅を経て直江津駅で下車する。閉店までの日数が少ない中、４月９日、１７日、２６日の３回訪れることができた。

〔高田駅（えちごトキめき鉄道）〕

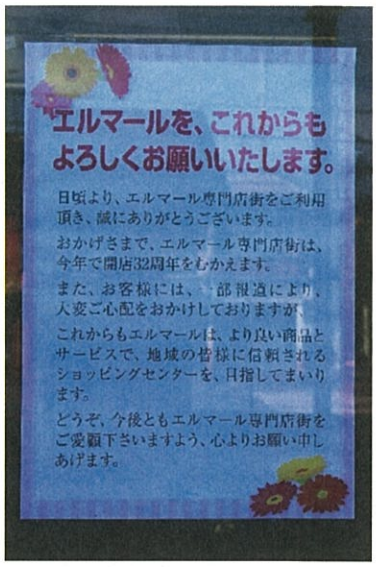
〔直江津駅（えちごトキめき鉄道）〕

〔店舗入り口〕　　〔閉店セールの幟旗〕

〔閉店の幟旗〕



〔閉店の挨拶〕



〔継続の挨拶〕

児童が活動で訪れる平日でも、閉店セールで人出は多くなっていた。閉店セールの幟旗が立ち並び、紅白幕と「閉店」の文字が並ぶ店内は日常ではない独特な雰囲気があった。同時に、継続することが決まっていたエルマールショッピングセンターの通常営業が児童には対照的にとらえられた。

５月１２日の閉店を迎えた後、５月２８日、７月１７日エルマールショッピングセンターを訪ねた。児童は、シャッターが降り、売り場が狭くなったにも関わらず、ガランと広々した印象の店内に驚くと共に、４月と変わらず営業しているエルマールショッピングセンターのお店に興味をもった。「イトーヨーカドーで働いていた人はどうしたのだろう」「エルマールのお店が営業していてうれしかった」と感想をもった。

〔閉店したエリア〕

〔営業を継続するテナント〕

閉店から５ヶ月が過ぎた１０月２５日、イトーヨーカドーが撤退して空いていたエリアに新規にスーパーマーケットが開店し、同時に、エルマールショッピングセンターが一部店舗の移動などを伴ってリニューアルオープンした。

開店・新装開店の日はあいにくの天候だったが、開店時刻の前から長蛇の列ができていた。開店時刻になり、行列をつくっていたお客さんが店内に入る様子を見ながら、児童は自然と笑顔で拍手をしていた。長い行列が終わるのを待って、店内に入ると、スーパーマーケットのエリアにも行列ができ、入店制限がかけられていた。児童は、「たくさんのお客さんがいた。どこから来たのだろう」「きっと新しいお店が開店するのをずっと待っていたのだと思う」「テレビ局や新聞社の取材が来てい

た。そんなに注目されていたのが驚いた」と感想をもった。

〔オープン前の行列〕

〔混雑する店内〕

４月からおよそ半年をかけ、大型スーパーマーケットの閉店とショッピングセンターの継続、新規店舗のオープンを見つめ続け、児童は、まちで働く人、まちで買い物をする人の動きをとらえたり、商店の閉店によるにぎわいの減退と、開店によるにぎわいの創出を実感したりした。

Ⅱ　朝市と「まち」の人の営み

イトーヨーカドー直江津店への着目と並行し、上越市で開かれる朝市（「二七の朝市」「四九の朝市」「三八の朝市」「一の日市」）及び、妙高市で開かれる朝市（「六十の朝市」）を訪れ、お店の人とかかわりをつくりながら、朝市の伝統や、朝市での「まち」の人の交流をとらえたりした。

駅とまちの人の営みを捉えるにあたり、「朝市」を焦点化する価値として、朝市が開かれる通りと駅の位置関係に着目した。「三八の朝市」（上越市直江津）「一の日市」（上越市柿崎）「六十の朝市」（妙高市新井）は、それぞれ直江津駅（えちごトキめき鉄道）、柿崎駅（ＪＲ）、新井駅（えちごトキめき鉄道）から徒歩数分の通りで開かれ、駅が人々の集まるにぎわいの中核として位置付いていることを子どもに伝えると考えたのである。本来、朝市は、まちごとに開かれ、まちの外から訪れる人を見込むことは少ないだろう。しかし、上越市では、４つの朝市をＨＰやフリーペーパーなどで広報し、観光の一つとしてＰＲしている。買い物をする目的だけでなく、まちの人との関わりや文化としての「朝市」をとらえ、訪れる目的とすることによって、高田駅、直江津駅から他の駅やまちを訪れるきっかけをつくることができる。このように考え、「三八の朝市」「一の日市」「六十の朝市」へ鉄道を利用し訪れ、また、駅から歩くことで、その距離を実感するようにした。

〔「三八の朝市」　上越市直江津　えちごトキめき鉄道直江津駅から〕

〔「一の日市」　上越市柿崎　ＪＲ信越線柿崎駅から〕

〔「六十の朝市」　妙高市新井　えちごトキめき鉄道新井駅から〕

「二七の朝市」「四九の朝市」は上越市高田の中心である本町商店街と平行する通りで開かれ、本校から徒歩数分で訪れることができる。この２つの朝市には、高田の小学生が生活科や社会科の学習で訪れることが多く、本校の児童が訪れることもお店の人にとって特に珍しいことではない。逆に、直江津、柿崎、新井の朝市を本校の児童が訪れることはお店の人の目を引いた。子どもは「どこの学校から来たの？」と声を掛けられたり、「あれ、附属小の体操着だね」と驚かれたりした。また、「どうやって来たの？」と質問され、電車で来たことを答えたり、「帰りの電車は何時？」と訪ねられたりしながら、朝市に鉄道で来る人が珍しいことを知ったり、自分が鉄道で朝市に来ていることに自覚的になったりした。

また、子どもは、どこの朝市にも出店しているお店の方がいることに気付いた。５つの朝市を訪ねることで、「１」の日から「１０」の日まで、「５」の日を除いて朝市が開かれ、それぞれの土地で、それぞれのまちの人とかかわりをつくりながらお店を開く人の営みもとらえた。

Ⅵ　教室は「えきまち」

抽象的で概念的なとらえである駅とまちのかかわりを、３年生児童がより具体的、体験的にとらえることを意図し、教室を「えきまち」の空間とする活動に継続して取り組むこととした。

１　えきまち駅（えきまち鉄道・えきまち急行）

一人一人が切符を持って改札を通る経験を繰り返した児童は、木材でつくった改札を教室の出入り口に設置し「えきまち駅」をつくった。はじめは駅員になりきる児童のみであったが、やがて、コンパネに車輪を取り付けて列車をつくり、運行す

る児童が現れた。「えきまち鉄道株式会社」と「上越えきまち急行」の鉄道会社がつくられ、２つの車両が、廊下を運行した。３年１組教室のある２階フロアの職員室、図工室、音楽室などを駅とする路線を設定し、休み時間などに学級の児童や他学年、他学級の児童も乗客として運行した。

〔車両づくり〕

〔えきまち鉄道の運行〕

〔踏切や改札をつくる〕

〔えきまち駅改札口〕

２　えきまち商店街

駅からまちに出る経験を重ねながら、児童は駅前には商店街がつくられていることが多いと考えるようになった。このことを基に、児童は教室に「えきまち商店街」をつくり始めた。教室の出入り口に「えきまち駅」がつくられた後、駅前のオープンスペースを商店街の通りに見立て、段ボールで店舗をかまえるお店が並んだ。校外での活動で訪れた海岸で拾った流木や貝殻、シーグラスで工作をしたり、紙粘土やプラ板で飾りつくったりして商品とした。

〔えきまち商店街〕

３　えきまち資料館（ミニチュアえきまち、えきまち雪月花、えきまち美術館）

「えきまち上越」の時間は、校外に出かけて体験することを中核としたが、児童

は、教室にいながら列車の中にいる雰囲気をあじわいたいと願い、教室の窓ガラスに列車や駅のイラストをペイントし始めた。また、紙粘土でつくった列車や線路、駅を並べたり、活動で訪れた朝市や駅前に建っているホテル、商店街のお菓子屋さんなどを再現したりして、ミニチュアを作成するようになった。この活動は、体験を通してとらえた駅とまちのかかわりを空想の地図に表しながら、俯瞰的に見つめることにつながった。さらに、えちごトキめき鉄道の直江津運転センターの見学で強く印象に残ったリゾート列車「雪月花」を段ボールで再現することに取り組んだ。

〔窓ガラスのペイント〕

〔ミニチュア「えきまち」〕

〔えきまち雪月花〕

4　えきまちイベント（えきまち上越フェア、えきまち上越クリスマス）

駅を中心としながら、まちの人の営みがひろがったり、まちがにぎわったりしていることをとらえた児童は、イベントを企画することで、教室の「えきまち」がにぎわうことを考えた。そこで、１０月２０日（日）の休日参観・学校説明会に合わせ、「えきまち上越フェア」というイベントを開催し、鉄道や商店街、資料館に多くのお客さんを招くことを計画した。当日に向けて鉄道車両の整備をしたり、商店街

の商品を増やしたり、ミニチュアをひろげたりした。また、一人一人が絵画や立体工作の製作に取り組み、教室全体をイベント会場として盛り上げた。

当日は保護者や家族、新年度の入学を希望する園児とその保護者などが教室を訪れた。児童は、列車を運行したり、お店で商品を配ったり、展示している作品を紹介したりしながら、イベントによる盛り上がりを実感した。

〔えきまち上越フェア〕

児童は１２月にも「えきまち上越クリスマス」を企画し、イベントを開催することを通して、まちのにぎわいをつくることの楽しさを実感した。

このように、児童は、教室を「えきまち」の空間とすることに継続して取り組み、日常的に鉄道会社の人や商店街の人、資料館の人になりきりながら、駅とまちのかかわりを具体的、体験的にとらえていった。

Ⅲ　鉄道会社の人の営み

Ⅰ、Ⅱの活動を通し、鉄道を利用して移動しながら目的地を訪ねることを十分に経験してきた子どもが、鉄道そのものの意味や価値に目を向けたり、列車の運行に携わる人の思いや願いにふれたりすることを意図し、えちごトキめき鉄道直江津運

転センターを見学した（令和元年６月４日　上越市直江津）。

車両の連結を解除する作業や、線路を保守点検する作業の様子を見学したり、車内アナウンスを体験したりした。その後、えちごトキめき鉄道は総延長およそ１００kmであること、電気を動力として動く電車と、エンジンを動力として動く気動車があることなどを教えてもらった。また、運転手さんや車掌さんへの質疑応答の中から、車掌さんの「チームワークで列車を走らせている」という言葉が子どもに強く残った。

〔連結を解除する作業を見学〕

〔車内アナウンスを体験〕

〔手旗による入構を体験〕

〔洗車の様子を車内から体験〕

〔歴史的な転車台・車庫を見学〕

〔運転手さん・車掌さんに質問〕

また、えちごトキめき鉄道の魅力として注目されるリゾート列車「雪月花」を見学した。豪華な内装や、通常より高価に設定された乗車料金に驚きながら、通勤や通学、日常の交通手段としての価値だけではない、鉄道会社の多角的な努力にふれることができた。

この体験以降、Ⅰ、Ⅱの活動において、子どもの目が、駅員さんや運転手さん、車掌さんにも向くようになり、鉄道の視点が色濃く、駅とまちのかかわりをとらえ

よとする子どもの思考が幅広く深みが増した。また、Ⅳの活動にひろがりが加わった。

〔リゾート列車「雪月花」を見学〕

また、直江津運転センターの見学がきっかけとなり、活動の終末にえちごトキめき鉄道の代表取締役社長である鳥塚亮様を教室に招き、「たのしいトキめき鉄道」と題する特別講演及び、児童との交流を行うこととなった。（令和２年２月１４日）

〔「えきまち鉄道」をＰＲ〕

〔特別講演を聴く〕

〔「えきまち商店街」をＰＲ〕

〔ミニチュア「えきまち」をＰＲ〕

鳥塚社長は、児童に対して、直江津駅で販売されている駅弁が日本一の賞を獲ったこと、トンネルの中にホームがあり、３００段近くの階段を上って地上の改札に出る「筒石駅」、急な登りの途中にあり、スイッチバックで入構する「二本木駅」のことなど、えちごトキめき鉄道の特色や魅力を伝えた。

また、えちごトキめき鉄道は、「妙高はねうまライン」「日本海ひすいライン」の２本の路線を運行しながら、地元の人の交通手段となっているばかりでなく、貨物列車による長距離輸送に欠くことのできない鉄道路線としての意義をもっていることを語った。そして、リゾート列車「雪月花」の運行や、「夜行列車」の企画など、

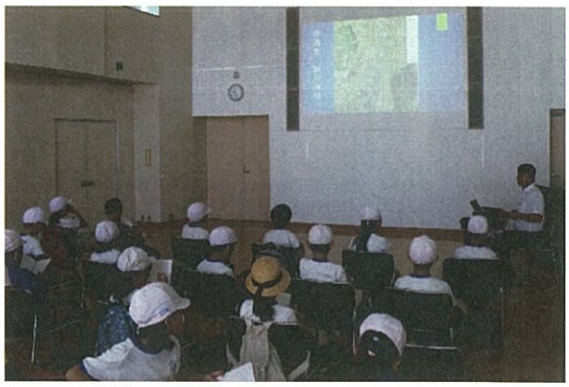
えちごトキめき鉄道の経営に関わる内容について、千葉県の鉄道会社の経営改善に取り組んだ社長自身の経歴とつなげながら語った。「廃止になる鉄道はいっぱいある」「『地元に愛される鉄道』『みんなの鉄道』にならなければいけない」ということを児童に伝え、特別講演の後、担任教師に「鉄度は夢と希望を乗せて走る」「駅が賑やかだと、まちが元気」と伝えた。

特別講演の当日となった２月１４日以前に、児童は、活動Ⅳにおいて、上越市・妙高市の両市役所を訪ね、駅を中核としたまちづくり政策について学んできた。児童は、一人一人が、体験を通して培ってきた、鉄道を利用する人の目線、「まち」に生活を営む人の目線、鉄道を運行する人の目線、鉄道と連携する行政の人の目線に、鉄道会社を経営する人の目線が加わり、駅とまちのつながりを統合的にとらえることにつながった。

Ⅳ　上越市・妙高市の駅を中核としたまちづくり政策

児童は、鉄道を利用しながらまちへ歩き出し、体験を通して駅周辺にひろがるまちの様子をとらえて来た。その中で、高田の本町商店街や「六十の朝市」で訪れた新井の朝日町商店街には両側にアーケードがあることや、直江津の商店街は雁木が連なっていることに気付いた。自分たちでまちを歩きながら考えるだけではひろげることのできない範囲に児童の目が向いてきたことをとらえ、市役所を訪ねることを計画した。

妙高市は人口減少・高齢化への対応として、駅を中核としたコンパクトシティーの構想を進めている。１０月９日に妙高市役所を訪ね、妙高市企画政策課　長谷川様の「駅を中核としたまちづくり」という講話を聞いた。



〔妙高市役所　長谷川様　講話「駅を中核としたまちづくり」〕

講話の中では、妙高市新井地区における人口分布の推移や商業の中心の変遷について、自家用車の普及の関係から話された。新井駅は、もともと多くの人が住むまちの中心に建てられ、商業の中心でもあった。商店が多く、便利な地域であったため、地価が高くなり、自家用車の普及もあって郊外に住む人が増えたこと、新たな商店も郊外に進出し、駅周辺のにぎわいが少なくなったことなどが、児童の印象に強く残った。また、これまでに取り組まれた駅周辺の再開発や今後計画されている公共施設の移設についても話があった。

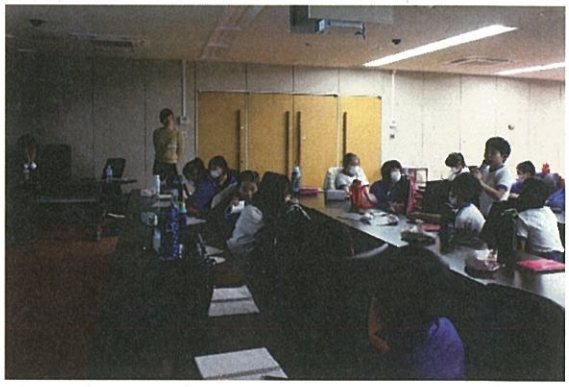
この活動の後、児童は、「車やタクシー、バスは列車のライバル」なのではないかと考えるようになった。また、車と比較することで、電車は、一度にたくさんの人を乗せられるし、空気を汚しにくいよさがあるとも考えるようになった。

妙高市の政策を知った児童は、上越市の政策を知りたいと願った。そこで、１１

月１８日に上越市役所を訪ねた。上越市企画政策部交通政策課　北島様、西山様、上越市産業観光交流部産業政策課　畑山様の講話を聞いた。北島様からは「えちごトキめき鉄道の利用促進政策について」、西山様からは「高田地区及び直江津地区のこれまでのまちづくりについて、これからのまちづくりの政策について」、畑山様からは「上越妙高駅周辺の開発について（開業から現在まで）」について聞いた。

〔春日山駅（えちごトキめき鉄道）〕

〔上越市役所〕



〔講話と質疑応答〕

３名の方からの講話では、上越市の政策としてえちごトキめき鉄道と連携しながらイベントを運営していること、北陸新幹線の開業に伴って考えられた上越妙高駅のコンセプトについて、今後の駅東側の開発計画について、新幹線の利用者数向上に向けた取り組みについて、人口減少の推移や商業地の変化について聞いた。児童はえちごトキめき鉄道のイベントや、上越妙高駅についての話題が最も関心をひかれたが、「このまま人口が減ると、まちがなくなってしまう」という話が印象深く残った。

Ⅴ　鉄道乗車体験及び「まち」のとらえのひろがり

えちごトキめき鉄道の高田駅から新井駅に向かう途中にＪＲ上越妙高駅がある。児童は、上越妙高駅の乗降客が他の駅に比べて多いと感じた。生活経験として、上越妙高駅から新幹線に乗車したことがある児童もおり、「新幹線に乗ったり、新幹線線を降りたりした人がいるから、上越妙高駅の乗降客は多いのではないか」と考えた。そこで、１０月２８日に上越妙高駅や駅周辺を歩く活動を実施した。

ホームから階段を上り、２階にある改札口を抜けると、通路をたくさんの人が歩いていた。これまで利用してきたどの駅よりも通路が広く、駅全体が新しかった。階段で１階に降りて駅の外に出ると、駅の大きさがよく分かった。しばらく駅の大きさを見た後、駅の周辺を歩いた。児童は、「工事中の場所やホテルが多かった」「商

店街がなかった」「すぐ近くに山があって、自然が多かった」などと感想をもった。駅の中はたくさんの人がいたが、外を歩いている人は少ないと感じた児童もいた。

〔ＪＲ上越妙高駅〕

〔開発が進む駅の西側を歩く〕

直江津駅と直江津のまち、高田駅と高田のまち、柿崎駅と柿崎のまち、新井駅と新井のまちというように、これまで訪れた駅の周辺にはまちがあったが、上越妙高駅の周辺はまちという印象を受けにくかった。そこで、翌１０月２９日、上越妙高駅は、北陸新幹線の開業に合わせて、ＪＲ脇野田駅が駅名と場所を変更してできた駅であることを伝え、「上越妙高というまちはあるか」「上越妙高駅の周りはこれからどうなるか」と考えた。

児童は、「大きな道路があるから、にぎわってくると思う」「まだ工事が続いていて、まちをつくっている途中だ」「これから商店街ができると思う」「仕事とかで上越妙高に来る人のためにホテルがたくさんあったから、人がたくさん来てにぎわうと思う」などと考えた。

上越に新幹線が通ったことについて考えをひろげることを意図し、北陸新幹線に乗車する活動を実施した。１１月８日、上越妙高駅から糸魚川駅まで乗車し、糸魚川のまちを歩いた。

行きは上越妙高駅から糸魚川駅まで北陸新幹線「はくたか」に乗車し、１０分ほどで到着した。帰りはえちごトキめき鉄道を利用した。乗り換えの時間を差し引くと６０分ほどの乗車時間であった。

児童は、新幹線の座席シートの心地よさや、静かさが印象に残った。また、トンネルの中に入っている時間が長いと感じた児童や、外から見ると速いけど、乗っていると速さは普通に感じたという児童もいた。車内でコンピュータを開いている乗客がいたこともに気付いていた。

〔ＪＲ上越妙高駅〕

〔新幹線ホーム〕

〔ＪＲ糸魚川駅〕

〔糸魚川駅前の商店街〕

１１月１２日に振り返りを行い、行きと帰りの乗車時間、料金などを提示しながら、北陸新幹線とえちごトキめき鉄道を比較する時間を設定した。児童は、「新幹線は行きたい所に速く行けるよさがある。だけど、行けない所もある」「電車（えちごトキめき鉄道）は、一つ一つのまちをつないでいるから、行きたい所に行ける」「新幹線に乗るか、電車（えちごトキめき鉄道）に乗るかは、その時の状況による」「急いでいる時は新幹線に乗るといいけど、時間がある時は安い方がいい」などと考えた。「時間」「料金」に加え、「行けるまち」を視点にしながら、北陸新幹線とえちごトキめき鉄道にはそれぞれのよさがあると考えていた。

また、この振り返りをきっかけに、妙高市役所での講話で「車やタクシー、バスは列車のライバル」なのではないかと考えた児童に変化があった。上越妙高駅には大きなバス乗り場がつながっていたり、どこの駅にもタクシー乗り場があったりすることもとらえていた児童は、「タクシーやバスは、ライバルではなく、仲間かもしれない」と考え始めた。「新幹線は遠くの駅まで速く連れて行ってくれて、その先に電車が行きたいまちまで連れて行ってくれて、電車で行けない所に、バスやタクシーが連れて行ってくれる」と考えたのである。新幹線に乗って、これまで以上に距離のある場所まで出かけたからこそのとらえのひろがりがあった。

新幹線に乗って糸魚川へ行った経験から、児童は、ＪＲ信越線とえちごトキめき鉄道を走る特急「しらゆき」に乗ってみたいという願いをもった。そこで、ＪＲの快速列車で長岡駅に行き、長岡のまちを歩き、帰りに特急「しらゆき」を利用する活動を１月３１日に計画した。

〔ＪＲ長岡駅〕

これまでの活動を通して、駅の周りの特徴をつかんできた児童は、長岡駅に到着すると周辺の様子を確かめた。駅前がローターリーになっていることやバス乗り場、タクシー乗り場、レンタカーがあること、ホテルがあることなどをとらえ、列

車とバスやタクシーの関わりを確かめた。

〔駅からつながるショッピングモール〕

〔長岡駅前　大手通商店街〕

〔閉店したイトーヨーカドー長岡店〕

〔特急「しらゆき」〕

ＪＲ長岡駅は、これまでに訪れた上越市、妙高市、糸魚川市の駅にはなかった駅からつながるショッピングモールがある。児童は、いつの間にか、たくさんのお店があり、レストランや本屋、洋服屋などが並ぶ所を歩き、「駅から出ていないのにショッピングモールになった」と驚いた。また、長岡駅は、市役所が入る「アオーレ長岡」に連絡通路でつながっている。児童は、ショッピングモールの先に、いつの間にか市役所のような所に来たと驚き、どこまでが駅だったのかと考えた。

駅前の通りは大きなアーケードが続く商店街になっていた。高田や直江津、糸魚川の商店街より幅が広い通りに驚いたり、タクシー乗り場があることを見つけたりした。また、駅の前に立っている白い建物が直江津と同じように閉店したイトーヨーカドーであることを発見した。

２月３日に振り返りを行った。児童は、「駅から出ていないのにショッピングモールになった」驚きを起点に、「駅から出なくて買い物ができることはいいこと」「駅で買い物をするために電車に乗る人がいるかもしれない」と考えた。しかし、一方で、駅前でイトーヨーカドーが閉店していたことを思い出した児童の発言をきっかけに、「駅前の通りの商店街は、ビルやマンション、塾が多くて、お店は少なかった」と感想を話したり、「駅前のイトーヨーカドーは、駅の近くに住んでいる人には便利だったはず」と考えたりする児童がいた。すると、「駅から出ないで買い物ができることはいいことじゃないかもしれない」と話す児童がいた。電車で買い物に来る人にとってはいいことだが、商店街で働く人や駅前に住んでいる人にとってはいいことではないかもしれないと考えたのである。そして、「駅が大きくなり過ぎることは、まちの人にとってよくないのかもしれない」と考えるようになった。

上越妙高駅を訪れたことをきっかけに、新幹線を利用し、上越市・妙高市から離

れ、糸魚川市を訪れたり、さらに長岡市を訪ね、特急に乗車したりする活動を展開した。上越を離れ、また、新幹線や快速、特急に乗車する体験をすることで、逆に、上越のまちと上越の鉄道とのつながりをとらえ直すことができた。また、鉄道とバス、タクシーのかかわりを考え直したり、駅とまちのつながりをとらえ直したりすることとなった。

以上のような活動を通して、児童は、駅を起点にまちとかかわり、まちを生きる人の営みを捉えたり、まちにおいて駅がもつ役割を考えたりしながら、人と人とが互いにつながり合うまちのとらえをつくってきた。

※学習で使用した教材やワークシート、学習風景を撮影したビデオや写真、指導計画書などを添付して提出してください。